弘大農学生命科学部 同窓会会報

第２６号

平成２０年６月　発　行
発行 弘前大学農学生命科学部同窓会
TEL ０１７２－３６－２１１１
FAX ０１７２－３９－３７５０
振替 ０２３４０－７－５６４
印刷（株）　笹　軽印刷

進む顧客視点での学部改革

同窓会長　三　上　　巽（たつみ）

はじめに

同窓会の皆様、お元気でお過ごしでしょうか。

さて、私共がお世話になった農学生命科学部は、前身の農学部が1955（昭和30）年７月に文理学部農学科を発展的に改組独立し設置され、その後1997（平成９）年10月に理学部・農学部の改組により現在の農学生命科学部として継続存置のもと、

附属２農場での地域連携に向けた取り組み

53年の歴史を刻みながら今日を迎え、この間6,508（卒業生5,840名、修了生668名）の同窓生を数えるところとなりました。

独法化後５年目を迎えた母校

母校・弘大、その中での当学部の歴史の中で最大の変革の出来事としては2004（平成16）年４月に、半世紀余に亘る国直轄の国立から国立大学法人という名の独立行政法人に移行し、従前に比べ自主・自立、自己責任のもとでの大学運営が求められることになったことがあげられます。その法人化後、母校・弘大は５年目を迎えましたが、法人化後の大学運営では何がその要諦と認識すべきでしょうか。不肖私は、内部評価はもとより、より重要な観点としては「お客様（顧客：民間経営はお客様が無いと倒産する）である進学志望者並びに産・学・官・金との共同・連携等を含めた成果等を駆使し、地域の振興に寄与・貢献を期待する地域住民・外部関係者から見ての『独立行政法人“弘前大学”の実力・実績への評価如何』に掛かっている」のではないかと考えます。

農学生命科学部の主な取組み

大学、その中での学部運営にあたって法人化の実効を図るためには『教職員の意識改革&改革目標の実践』が求められます。このような観点から最近の学部における主な取組み状況を列挙してみますと

①「『理農融合』教育の具体化を狙いとした『学科再編成』」（詳細は本会報、高橋学部長の「学科再編報告」参照のこと）

②「学部附属生物共生教育研究センター金木農場の『ながいも原種ほ生産』＆藤崎農場の『リンゴとチューリップのフェスティバル』の実施」（表紙写真参照のこと）

③「陸奥湾産ナマコを活用した地域活性化対策の確立を目指した『ナマコ研究センター』の開設」

④「地元特産資源を活用した地域活性化を狙いとした『公開講座』の実施」

等から、学部教職員の方々の前向きな対応に心強いものを覚えますと共に、今後における更なるご尽力をご期待申しあげます。

求む同窓会員・学部サポーター

少子高齢化の時代背景のもと、今や「大学全入時代」を迎え、入学学生の確保等、母校・弘大農学生命科学部を取り巻く状況は厳しさを増しつつあります。このような時期であればこそ、私共同窓生は一人一人がお互いの立場を活かし母校活性化に向けての応援団・サポート役を担って頂きますよう、同窓会の立場からも衷心よりお願い申しあげます。　（以上）

事務局から

平成17－18年度総会で「弘前大学農学生命科学部同窓会における個人情報の取り扱いについて」が制定されました。支部会開催などで、会員情報が必要な際には「同窓生情報活用依頼書」を郵送またはファックスでお送り下さい。様式は会報第23号（2005年６月１日発行）の10ページにあります。

同窓会ホームページ（http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/）からもダウンロードできます。

農学生命科学部の“第２期”へ
――学科再編報告

農学生命科学部長　高　橋　秀　直

2008年４月、これまでの４学科から５学科に再編した教育がスタートしました。2004年度法人化後の基本的課題でしたが、前任豊川学部長から引き継いで２年、学部内での１年半の検討と文部科学省との半年の交渉を経て漸く果たせたことになります。

４学科から５学科へ――学科の個性を出し、きめ細かい教育

農学生命科学部発足から10年で学科再編に取り組む必要は、何よりも大学を取り巻く状況の激変への対応です。テーマは、教育機能強化と地域・社会連携。これまでは研究視点、教員視点から大学のあり方を考えればよかったのですが、教育や地域・社会連携も重視されるようになりました。

４学科から５学科にしたのは、学科の個性を出しやすくする、１学科の学生数を減らして実験実習・演習重視のきめの細かい教育をするためです。

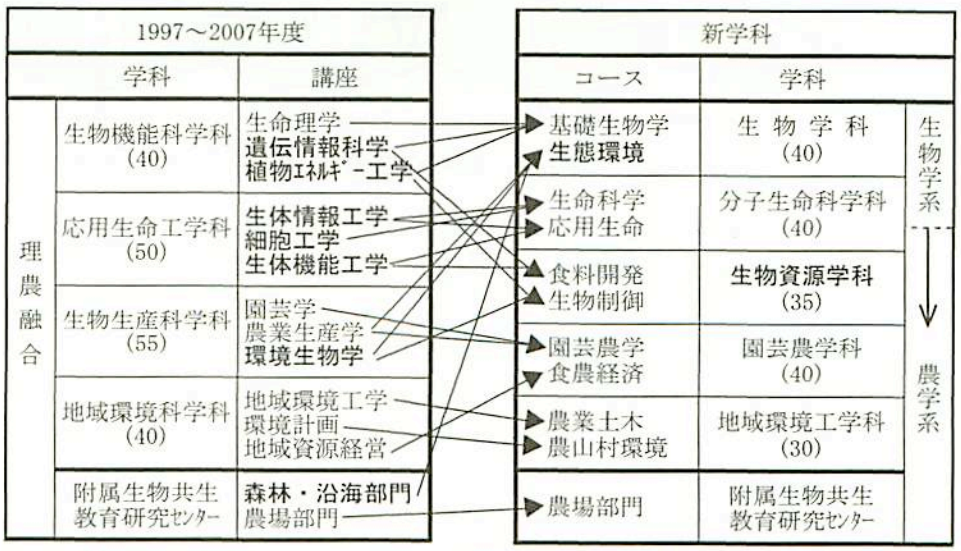
中身が分かり、流行り廃れがない学科名へ

教育や地域・社会連携への視点は、講座の廃止と教育コースの設置、そして学科名に示されています。中身が分かる、流行り廃れがない、総合的視点で付けた学科名です。

これまでの学科名と講座名を正確に言える人は、私も含めて学部にさえいません。第１学科、第２学科‥‥などと呼んでいます。名前から中身も違いも分かりません。

農学部創立以来の学科名をご覧ください。1990年頃から全国的に○○科学科のように“科学”を強調する学科名が支配的になりました。ハイテク、バイテクのような科学技術の高度化を背景とする“科学・理論”志向があったと思います。しかし、農学のような応用科学では、とりわけ教育や地域・社会連携では、様々な視野を持つ幅広い“学”の視点が必要です。“農業生産科学”といえば自然科学的ですが、“農学”といえば人文・社会科学をも含む総合科学です。新学科名が○○科学科から○○学科に変わっているのは、このような認識を表現しています。

もうひとつ、「生物学科」「園芸農学科」や「工学科」を復活。流行りの名ではありませんが、いまの流行りにすると数年で陳腐化してしまいます。卒業生は学んだ学部、学科名を背負って40年、50年の人生を送ります。数年で名前がなくなるのでは卒業生に対する責任を果たせません。1990年以降転々とした流行りの学科名に飽き飽きして、長い歴史に耐えた名前が見直された面もあります。



（　）の数字は入学定員　→は移動関係を表わす。ゴシックは編成替えが大きい分野

農学部					農学生命科学部	
1955年7月	1963年4月	1966年4月	1969年4月	1990年4月	1997年10月	2008年4月
農学科	園芸化学科	園芸化学科	園芸化学科	生物資源科学科	生物機能科学科	生物学科
					応用生命工学科	生命科学科
	園芸農学科	園芸農学科	園芸農学科	農業生産科学科	生物生産科学科	生物資源学科
						園芸農学科
		農業工学科	農業工学科	農業システム工学科	地域環境科学科	地域環境工学科
附属農場	附属農場	附属農場	附属農場	附属農場	共生センター	共生センター

「生物学科」を持つ唯一の農学系学部を表現

52ほどある国公私立農学系学部で「生物学科」があるのは、本学部と島根大学生物資源科学部だけです。いずれも理学部にあった生物学科が農学部に移ったためですが、島根大では「生物学科」がいまなお“独立”しているそうですから、「生物学科がある農学系学部」と言えるのは、日本で唯一、本学部だけです。それが学部名「農学生命科学部」に表現されているのですが、類似名称として東京大学大学院農学生命科学研究科があるだけ、日本で唯一の学部名である所以です。今回の再編では、「生物学科」の存在を前に押し出すことでこの独自性を学科編成に表現しました。

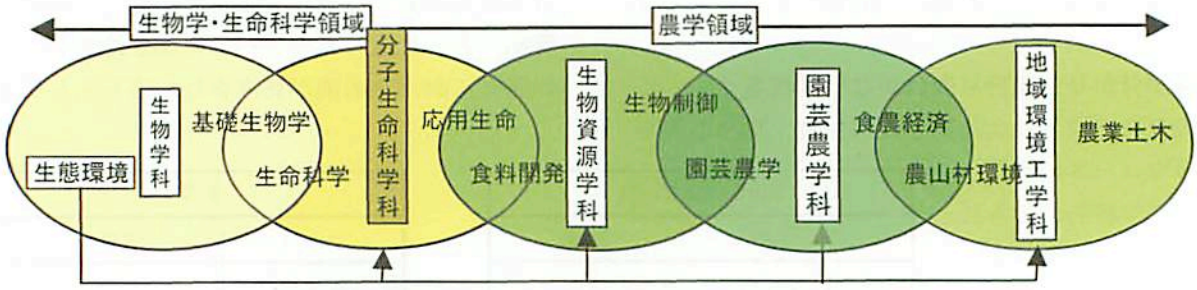
新たな「理農融合」へ

これまでの学科・講座編成の理念は「理農融合」でした。農学生命科学部が農学部と理学部生物学科と教養部生物系教員とで構成されたが故の理念ですが、基礎科学である生物学や生命科学と応用科学である農学との融合を目指した意欲に満ちたものです。

理念は、各学科・各講座の農学系教員と生物系教員との混成によって具体化され、同じ屋根の下で暮らす関係ができました。この混成は、研究面では相互に刺激的でしたが、教育面では、カリキュラムが生物学系科目と農学系科目の寄せ集めで、そのため、例えば、生物学志向の学生には興味がない農学系科目を受講させられているといった不満を生みました。

「融合」を唱えるのは簡単ですが、それぞれの学問には伝統的で固い手法があるので、研究から教育まで融合させるのは実際は容易でありません。両方を聴講するだけで「融合」できるわけでもありません。そこで、自分の専門や関心ある分野に立って隣接分野から異分野に関心を拡げてゆく、それによって「理農融合」を実現しようとしたのが、新しい学科とコースの編成です。

新しい学科とコースは、図のように生物学科から地域環境工学科まで、基礎生物学から農学・農業工学までをコースを媒介に連続的につながるように配置されています。このように配置することで、例えば農学系の学生がその学科に隣接する他学科の専門分野に容易に関心を拡げていけるようにしました。カリキュラムも、生物学系科目と農学系科目とのチャンポンでなく、生物学・生命科学と農学とはそれぞれの専門科目を主体にしつつ、隣接領域の科目を取り入れるなど相互乗り入れで他を学ぶことができるようにしました。



学科名の両脇の名称は、その学科のコース名

大学が学生を選んだ長い時代は終わり、学生が大学を選ぶ時代に様変わりしました。40年近く本学部にお世話になった者として、学部の将来を託す積もりで取り組んだ学科再編です。

定年退職教官からの寄稿～1

学生との思い出

村　山　成　治

金木農場に赴任しましたのは、森田　昇先生が学部長、青木二郎先生が農場長を勤められていた昭和40年の春で、学部の創立10周年記念の一環として金木町で講演会が開かれた年です。以来、40年余り農場実習を担当しつづけましところ、２代にわたって実習を行ったという親子も現れるようになりました。実習で忘れられないのは、農場職員がトラクタで小高い農道から水路に転落、下敷きとなってしまったとき、実習中だった学生10数人が駆けつけ、トラクタを持ち上げて救い出し、病院に搬送したことです。お陰でその職員は一命を取り留め、学生達の積極的な見舞い受けるという感激をも味わいました。また、これに遭遇した学生達はトラクタの危険性を目の当たりに体験することになったわけです。当初の実習は、コンクリート工やカカシ作りまでと農業に関する作業が幅広く取り入れられ、教員は俄に勉強、実技修得しなければならず、大変な有様だったのですが、学生達が積極的であったことに救われました。しかし、近年の学生は、言われるままに身体を動かしますが、ほとんど質問も意見もありません。高性能なロボットが実習しているように見えます。これは学生気質の変化ばかりではないようです。主要な作業のみを取り上げる今の実習に比べて、多様であった過去の実習がはるかに農業を考える契機になるのかもしれません。

最近、農場教員による卒論指導制度ができたために２年間でわずか８名の学生ですが、巣立っていきました。いずれも個性豊かで、彼らには、はらはらドキドキさせられましたが、忘れられない思い出もたくさん置いて行ってくれました。中にはある芸能に目覚め、学業に40%、その活動に80%、計120%のエネルギーを費やして学生生活を送った修了生がおります。その甲斐あって、県下のコンテストで一位の成績を取得し、県の行事を受託企画するまでになりました。卒業後は市民スクールを開き、社会に役立とうとしています。彼らは、高橋秀直学部長が同窓会報25号で『学力と能力とは別』と言っているような学生の類であって、将来、本学部の社会的役割を担えるような人間になってくれるものと信じています。

卒業・修了祝賀会にて

研究面では、水田の汎用利用による生産性の向上や水稲の持続的な栽培法など、畜産では低利用資源による畜産物生産など一貫してフィールド関係を行ってきました。しかし、理論的な結果がでても普及段階まで達しなかったことが残念です。それは労働や資本など現実の農家に許容されない課題が残ったからだと思います。これらの解決には、もっと時間とアイデアが必要です。幸い20年度以降、金木農場は約40年ぶりに教員２人制となりますから、学部との共同研究体制が整い、地域連携も深まって、地域貢献可能な研究成果が多数発信できるものと思います。

定年退職教官からの寄稿～2

物差しと秤で仕事をして40年余！

塩　崎　雄之輔

昭和41年２月頃、研究室の恩師から、藤崎農場に助手の席が設けられたので君やってみないかと言われ、決まっていた地方公務員を振って助手になった。農場には研究室もない、実験室もない、あるのは農具、秤、物差しだけだった。こういう農場の40年余を振り返ってみたい。

教　育： 農場実習は農家に劣らないよい作物管理、豊富な作目の種類があって実習教育の効果が上がるものと信じてきたが、定員削減によって施設園芸の廃止、果菜類の縮小、蔬菜各作目の面積縮小、ブドウ園廃止等が次々進められていった。今の作物栽培は“ままごと”である。

農場には学生が所属できない規則があったが、昭和50年から毎年果樹研究室の学生を１～３人預かった。学生には学会発表できるような仕事をして貰い、そして学生も研究室の先生方も私も、三者がよくなければならないと頑張ってきた。９割は満足できる結果であったと自負している。

社会貢献： リンゴで、良品多収のための研究、色々な栽培方式の研究、しかも農家を納得させる整枝剪定技術を持って管理してきた研究圃場があったから、視察者は一時3,000人もあった。

昭和54年設立の“りんご剪定技術研究会”（創設者：今喜代治氏）には、設立当初から参加し、また農場のリンゴ樹を貸し、剪定技術向上のための交流会の場を提供し続けて来た。最盛期の会員数は900余名（北海道から山口県まで）あった。本会を通じて、優秀な農家とたくさん交流ができ、研究上のヒントを戴いた。今でも親しくお付き合いしている方々がいる。

また学部主催の公開講座の講師を勤めてきたが、何といっても農場主催で全９回開催した『リンゴを科学する』は毎回９講座開講、学部の先生方のご協力により大盛況（1回は不入り）であった。また20年ほど前から、北は北海道から南は広島まで剪定講習会・講演会の依頼がくるようになった。さらに、中国にも指導に出かけ、９回目となった。

このような活動等が認められて全国大学農場協議会から“農場教育賞”も戴いた。

研　究： 最初はニンニクやナガイモ・銀杏イモの栽培的研究をやり、リンゴの木が4、5年生になった頃から、整枝剪定・栽培方式の研究を始めた。樹齢とともに変わる収量・品質、葉の稼ぎ、あるいは半密植主幹形・密植主幹形の維持方法、台木の比較等を続けた。また、リンゴ根の研究、若木の移植試験では教科書・参考書に記載されていることと異なる知見が得られ、やってみなければ分からないものだ、ということを痛感した。また農場の経営戦略上、リンゴ新品種の育成にも着手、その結果‘こうこう’（美味・貯蔵性抜群）が品種登録できた。

ご褒美： リンゴ農家にとって最も重要な“整枝剪定”はとても面白い作業だと思っている。そしてリンゴの場合、数ある果物の中で最も難しいと言われ、技術を習得するには長年の経験の積み重ねが必要である。40年間、自分が剪定した樹を花咲く春から収穫の秋まで観察・調査し続けてきた。剪定（その結果）が面白くて、氷点下のリンゴ畑、吹雪のリンゴ畑に１人立って調査、あるいは剪定修行をしていたことが懐かしく思い出される。

中国では色々な名所、旧跡を案内して戴き、各地の食文化の違いも十分に楽しませてもらっている。さらにはネパールの奥地にも招かれて出かけたことがある。これらは、研究成果が出にくい泥臭い研究に耐え、取り組んできた“ご褒美”であると思っている。

農場での40年余は色々なことがあったけれども、楽しいことの方が多く、十分満足している。

最後に、恩師、職場の仲間、多くのリンゴ作り達に心から感謝申し上げます。

平成19年度卒業生・修了生の祝賀会ならびに就職・進学先

平成19年度の弘前大学卒業証書授与式が平成20年３月21日午前10時から弘前市民会館で行われた。農学生命科学部の卒業生は192名であった。大学院の学位記授与式は午後１時から弘前大学創立50周年記念会館で行われ、農学生命科学研究科修了生51人に対して、修士（農学生命科学）の学位が授与された。平成19年度末現在で、農学部と農学生命科学部を合わせての卒業生は5,840人に、研究科の修了生は農学研究科と農学生命科学研究科を合わせて668人になった。

授与式終了後、同窓会主催で恒例の記念写真撮影（校舎正面玄関前）が、学部・後援会との共催で祝賀会（大学会館）が行われた。

祝賀会光景

本年度の卒業・修了生の就職先および進学先は以下の通りである（括弧内に数字を記入した場合以外は各１名である）。以下に記す人数には早期修了者・平成19年９月卒業者数も含まれる。

生物機能科学科（卒業者数40人）
服部コーヒーフーズ㈱、㈱スマイルスタッフ、フジプラント㈱、㈱ホーマック、岩手缶詰㈱、ニプロファーマ㈱、㈱サンデー、㈱ツルハ、山崎製パン㈱、ワダカン㈱、㈱エイチ・アイ・エス(2)、㈱登米村田製作所、薬糧開発㈱、東北ミサワホーム㈱、㈲保商、㈱ヤマヨ、㈱中萬学院、㈱ヨークベニマル、神奈川県警、北海道警察、北海道漁業協同組合連合会、弘前大学大学院(10)、北海道大学大学院(2)、東北大学大学院(4)、放送大学大学院

応用生命工学科（卒業者数49人）
名古屋製酪㈱、和弘食品㈱、ロマンス製菓㈱、ピープルスタッフ㈱、東北ペプシ販売㈱、ニッコクソフト㈱、キョーリン製薬㈱、第一ブロイラー㈱、秋田県警察、㈱ｉｋコーポレーション、アドバンテック㈱、㈱旭一、ユニテックフーズ㈱、イオン㈱、㈱ロイズコンフェクト、ニプロファーマ㈱、国立大学法人弘前大学、小野薬品工業㈱、㈱泉州銀行、㈱浅井ゲルマニウム研究所、北海道漁業協同組合連合会、弘前大学大学院(19)、北海道大学大学院(2)、東京農工大学大学院、静岡県立大学大学院、京都大学大学院

生物生産科学科（卒業者数58人）
㈱ダイナム、㈱やまや、㈱めがねの相沢グループ、㈱伊徳、㈱ビューカンパニー、岩手缶詰㈱、㈱大川水産、横浜丸中青果㈱、㈱ヴィ・ディー・エフ・サンロイヤル、アグロカネショウ㈱、㈱大田花き、第一ブロイラー㈱(2)、レッドハート㈱、㈱壷中庵八芳園グループ、㈲ファーム富田、㈱サンデー、㈲西部開発、㈱岡本漁網、創建ホームズ㈱、㈱山崎製パン、㈱埼玉冠婚葬祭センター、和民㈱、大和ハウス工業㈱、グラントマト㈱、㈱アインファーマシーズ、㈱ホーマック、インパック㈱、㈱一ノ蔵、北見市役所、青森県警察、愛知県経済農業協同組合連合会、新岩手農業協同組合、新函館農業協同組合、全国農業協同組合連合会青森県本部、大北農業協同組合、弘前大学大学院(17)、京都大学大学院

地球環境科学科（卒業者数45人）
ＫＴＣ外語学院㈱、㈱エル・コーエイ　、青森県信用保証協会(特定法人)(2)、㈱さくら野東北、㈱ライスアイランド、イオン北海道㈱、㈱イトーヨーカ堂、㈱前田建設工業、㈱ＮＩＰＰＯコーポレーション、日さく㈱、ニプロファーマ㈱、㈱ラルズ、㈱オザム（トワーズ）、日本通運㈱、㈱みちのく銀行、㈱日立東日本ソリューションズ、大和ハウス工業㈱、東和電材㈱、全国農業協同組合連合会青森県本部、㈱ツルハホールディングス、㈲イズミ農園、大成ロテック㈱、㈱仙台進学プラザ、㈱大成建設、東日本旅客鉄道㈱東北工事事務所、青森県庁、宮城県庁、茨城県庁、新潟県庁、千葉県警察、大鰐町役場、おものがわ農業協同組合、秋田おばこ農業協同組合、弘前大学大学院(10)

大学院農学生命科学研究科（修了者数51人）
第一三共㈱、㈱シバタ医理科、㈱トーホク、カネコ種苗㈱、㈱オーネックス、㈱ロイズコンフェクト、㈱十文字チキンカンパニー、㈱ＣＳ、日立電子サービス㈱、日本メジフィジックス㈱、ＷＤＢＩウレカ㈱、三洋化成工業㈱、花王カスタマーマーケテング㈱、月島食品工業㈱、山崎製パン㈱、三菱総研ＤＣＳ㈱、㈱ヴィ・ディー・エフ・サンロイヤル㈱、㈱ロックフィールド、生活クラブ生活協同組合、(財)ふくしま海洋科学館、㈱ディスコ、キョーリンフード工業㈱、光明理化学工業㈱、ＮＥＣソフトウェア東北㈱、フナコシ㈱、青年海外協力隊(派遣：タンザニア)、日本工営㈱、自営業、日特建設㈱、夢弦会、㈱建設技術研究所、日さく㈱、新協地水㈱、㈱レッドフォックス、東京都(Ｉ類Ａ)(上級)、横浜市立潮田中学校、岩手県立盛岡第二高等学校、北海道警察、北海道信用農業協同組合連合会、青森県農業協同組合中央会、岩手大学大学院連合農学研究科(10)

新任教員の自己紹介

園　木　和　典　　准教授（分子生命科学科　応用生命コース）

2008年１月に農学生命科学部に赴任いたしました。まさに冬本番の時期に赴任し、今年は雪が少なかったとかいうお話を耳にしますが、鹿児島県出身の小職には驚きの光景でした。研究分野は応用微生物学、生物資源工学で、微生物機能を活用した資源利用、特に非食系バイオマス（リグノセルロース）の高付加価値化について研究を進めています。産業に貢献できるような研究展開を、農学・理学・工学など学際連携を行うことで進めていきたいと考えています。

よろしくお願いいたします。

房　　家　琛　　助教（生物共生教育研究センター金木農場）

中国吉林省出身で、2001年に日本に参りました。弘前大学農学生命科学部大学院修士課程、岩手大学大学院連合農学研究科博士課程、株式会社　大商技術職員を経歴して、2008年１月16日に着任いたしました。生物共生教育研究センター金木農場配属です。専門分野は畜産学で、主に未利用・新規資源の飼料利用について研究してまいりました。金木農場で学部教員と共に、農場と地域の産業が連携する研究を展開し、これまでの研究と家畜管理経験を実験実習に生かして指導し、フィールドで活躍出来る学生を社会に輩出したいと存じます。よろしくお願いいたします。

前　多　隼　人　助教（生物資源学科　食料開発コース）

はじめまして。この春３月に北海道大学大学院水産科学院の博士後期課程を修了し、４月より農学生命科学部に赴任致しました。出身が北海道函館市であり、大学のキャンパスも同じく函館市にあったことから、今回が初めての本州住まいとなります。今までは食品中に含まれる機能性成分について研究をおこなってきました。特に海藻や野菜に含まれる色素成分による抗肥満、抗糖尿病作用に注目をしています。今後も弘前大学にて、農林水産業の盛んな青森県の生産物を生かす研究を進めてゆきたいと考えております。どうぞよろしくお願い致します。

松　本　和　浩　助教（生物共生教育研究センター藤崎農場）

私は鳥取大学の園芸学研究室で長い学生生活を送ってまいりました。初代教授はナシの神様と呼ばれる弘前出身の菊池秋雄先生。「農学は実学である」という先生の言葉が今でも生きており、ナシ産地の発展のため、栽培現場に密接に関連した研究が進められておりました。このたび藤崎農場に塩崎雄之助先生の後任として赴任することができ、菊池先生の御子息、卓郎本学名誉教授から続く、剪定を含むフィールド科学の研究に携わる機会をいただきました。鳥取が受けたご恩に報いるためにも、これまでの成果を受け継ぎ、この弘前のリンゴ栽培、研究の発展のために努力してまいります。どうぞよろしくご指導くださいませ。

教員人事

退　職

平成20年３月末日

塩崎雄之輔（しおざき　ゆうのすけ）
教授（藤崎農場）

村山　成治（むらやま　せいじ）
准教授（金木農場）

新　任

園木　和典（そのき　とものり）
准教授（応用生命工学科生体機能工学講座）
平成20年１月

房　家琛（ぼう　かしん）
助教（金木農場）平成20年１月

前多　隼人（まえだ　はやと）
助教（生物資源学科）平成20年４月

松本　和浩（まつもと　かずひろ）
助教（藤崎農場）平成20年４月

一部、卒業生の皆様に、「弘前大学同窓名鑑」作成のための調査カードが届いているようですが、この名鑑作成に当同窓会ならびに弘前大学同窓会は関わっておりません。

平成19－20年度同窓会総会報告

平成19－20年度総会が、平成19年７月７日15時から黒石市のグリーンパレス松安閣において開催されました。平成17－18年度事業報告および決算報告、平成19－20年度事業計画、予算および役員案、50周年記念事業の最終報告について、事務局より報告・提案され質疑応答の後、原案通り承認されました。

１．平成17－18年度事業報告

(1) 平成17年度事業報告

H17. 4. 15	同窓会役員会（農学生命科学部）
H17. 4. 18	卒業生・修了生へ記念写真の送付
H17. 4. 18	母校援助費（26万円）納入
H17. 4. 23	同窓会総会（弘前市：プリンスさくら亭）
H17. 5. 26	全学同窓会会費の納入（平成17年度分）
H17. 5. 27	上北支部総会（豊川学部長・工藤明教員出席）
H17. 6. 6	同窓会報第23号発行
H17. 7. 2	弘前大学農学生命科学部創立50周記念式典
H17. 7. 28	50周年記念事業慰労会（青森市：豊川学部長・福嶋事務長・工藤明、戸羽、加藤幸教員出席）
H17. 10. 3	同窓会報の在学生家族への送付（今年度より実施）
H17. 11. 21	五十嵐先生お別れの会（現職でご逝去）
H18. 2. 7	福島支部総会（加藤弘道教員出席）
H18. 3. 24	卒業・修了生同窓会入会祝賀会

(2) 平成18年度事業報告

H18. 4. 6	卒業生・修了生へ記念写真の送付
H18. 6. 12	全学同窓会会費の納入（平成18年度分）
H18. 7. 6	同窓会報第24号発行
H18. 8. 4	母校援助費（26万円）納入
H18. 10. 10	同窓会報の在学生家族への送付
H19. 3. 23	卒業・修了生同窓会入会祝賀会
H19. 3. 30	50周年記念誌発刊

＜参考＞
（平成19年度）

H19. 4. 7	卒業生・修了生へ記念写真の送付
H19. 5. 17	母校援助費（30万円）納入
H19. 6. 4	同窓会報第25号発行
H19. 6. 4	全学同窓会会費の納入（平成19年度分）
H19. 6. 22	同窓会役員会（農学生命科学部）
H19. 7. 7	同窓会総会（黒石市：グリーンパレス松安閣）
H19. 7. 20	上十三支部総会（十和田市：レストランとわだ）

総会の模様

総会終了後の懇親会

2．平成17－18年度会計報告

収入

項目	予算	決算	摘要
繰越金	2,735,953	2,735,953	
正会員会費	2,500,000	3,627,500	726名(627名)
入会費	2,780,000	3,020,000	303名
広告料	0	0	
利息	1,000	214	
振替手数料	-55,000	-81,500	
その他	0	75,000	
合計	7,961,953	9,377,167	

支出

項目	予算	決算	摘要
会報発行費	2,900,000	2,703,899	
卒業祝賀会費	950,000	513,967	祝賀会1年分
支部派遣費	240,000	83,400	
母校援助費	520,000	520,000	
会議費	270,000	160,620	
庶務・管理費	20,000	28,473	
通信・印刷費	20,000	50,330	
慶弔費	10,000	53,157	
全学同窓会会費	296,000	296,000	
予備費（繰越）	2,735,953	4,967,321	
合計	7,961,953	9,377,167	

3．平成19－20年度事業計画

(1) 総会の開催
(2) 役員会の開催
(3) 同窓会会報の発行（第25、26号）
(4) 支部活動への援助（教員・役員の派遣）
(5) 卒業・修了生同窓会入会祝賀会
(6) 農学生命科学部への援助
(7) 全学同窓会への援助
(8) その他必要と認められる事業

4．平成19－20年度予算

収入

項目	予算	摘要
繰越金	4,967,321	
正会員会費	2,500,000	500人×@5,000
入会費	2,780,000	(185人×@10,000×0.75)×2年
利息	300	
振替手数料	-77,800	入会費納入予想×@100
その他	0	
合計	10,169,821	

支出

項目	予算	摘要
会報発行費	3,000,000	年1回×2年分
卒業祝賀会費	1,100,000	
支部派遣費	240,000	
母校援助費	600,000	H17－18会費収入の1割
会議費	200,000	
庶務・管理費	40,000	
通信・印刷費	50,000	
慶弔費	100,000	
全学同窓会会費	296,000	@148,000×2年
予備費(繰越)	4,543,821	
合計	10,169,821	

5．平成19－20年度役員

役職名	氏名	勤務先	卒業年	教室名
名誉会長	高橋秀直	弘前大学農学生命科学部長		
顧問	岩井邦彦	元農学部同窓会長	32	土肥
	中尾良仁	元農学部同窓会長	32	土肥
	油川孝男	元農学生命科学部同窓会長	37	農経
	豊川好司	前弘前大学農学生命科学部長	38	畜産
会長	三上巽	青森ケーブルテレビ（株）専務取締役	42	農経
副会長	田村優一	青森県農林水産部長	46	育種
	須藤正光	弘前市都市整備部長	47	農地
	窪寺洋志	青森県農協中央会参事	49	農機
監事	工藤啓一	元弘前大学農学生命科学部	38	作物
	西川明満	元青森県農協中央会	45	作物
評議員	池田八郎	元八戸市役所	43	植病
	斉藤一志	（株）国土社	45	造施
	佐藤鉄雄	青森市農業委員会	45	育種
	蒔苗龍一	（株）東北建設コンサルタント	45	農地
	伊藤正光	青森県農林水産部冬の農業推進チーム	46	育種
	桑田博隆	青森県農林総合研究センター	46	植病
	木村利幸	青森県農林総合研究センター	48	昆虫
	福士有一	青森県立柏木高等学校	48	育種
	泉完	弘前大学農学生命科学部	53	水利
	蛯名正樹	弘前市役所建設部道路維持課	53	農地
	工藤博喜	津軽尾上農協農業振興課	54	果樹
	今智之	青森県農林総研(りんご試・育種部)	56	育種
	奈良岡馨	青森県工総研究(弘前地域技術研究所)	56	農利
	天内洋之	芝管工（株）総務部	56	農工
	田中満	青森県立柏木農業高等学校	58	育種
	東新一	青森県立三本木農業高等学校	平1	蔬菜
	鳴海純	青森県立藤崎園芸高等学校	平6	果樹
	新谷貴裕	（株）東北建設コンサルタント	平8	水利
総務幹事	工藤明	弘前大学農学生命科学部	47	水利
情報幹事	松崎正敏	弘前大学農学生命科学部	62	畜産
会計幹事	加藤幸	弘前大学農学生命科学部	平4	造施

6．50周年事業の最終決算報告

収入の部

醵　　金	16,403,000		
祝賀会会費	104,000		13名
同　ご祝儀	220,000		18名
合　　計	16,727,000		醵金者合計757名（積算人数807名）

支出の部

		内　訳	
式典・祝賀会等	2,037,138	100,000	シンポ謝礼・旅費（５名分）
		150,000	式典記念演奏（弘大フィル）
		100,000	特別講演謝礼
		1,542,840	祝賀会費用（シテイ弘前ホテル）
			５口以上の醵金者（159名）の会費を含む
		94,000	弁当、酒代（祝賀会用）
		25,298	消耗品代（レンゴウ、生協）
		25,000	人件費（学生、運転手）
記　念　誌	2,054,640		記念誌の印刷代、送料
地域振興支援	7,500,000		平成17年度分
	3,418,342		平成19年度分
事務経費	1,716,880	920,289	第１、２回分の印刷費、送料
		5,880	企業への特別研究依頼書送付
		3,200	学生のアルバイト
		2,120	元職員、卒業生等醵金依頼
		525	特別研究振り込み手数料（りんご協会）
		75,050	醵金振り込み手数料
		42,000	御苦労さん会補助
		636,866	第３回趣意書等の印刷、発送代
		525	特別研究振り込み手数料（同窓会分）
		24,000	名簿整理、袋詰め等アルバイト代
		5,900	記念誌の再送付
		525	特別研究振り込み手数料（同窓会分）
合　　計	16,727,000		

支部だより

上十三支部総会　出席報告

2007年７月20日、十和田市のレストランとわだにて、同窓会上十三支部総会が行われた。出席者は18名で、同窓会本部からは高橋学部長と加藤（幸）が出席した。

総会では、小槌央邦支部長（Ｓ40年卒）の挨拶に続いて、決算報告、予算案のほか、今後の支部運営などが協議された。その結果、従来どおり、支部総会を２年おき開催する旨などが決定された。また、新役員の選出が行われ、丸山幸悦氏（Ｓ47年卒）が新会長に、副支部長に保土沢正敏氏（Ｓ46年卒）、事務局長に中野渡牧雄（Ｓ53年卒）が選出され承認された。

議事の終了後、高橋学部長から学部に関わる情報提供として、2008年４月からの学部改組についての説明が行われ、引き続き、懇親に移った。２時間ほどの会ではあったが、出席者の近況報告や学生時代の思い出に話に花が咲いた会合であった。最後は、小槌会長の一本締めで会は終了した。

支部総会開催にあたって、三本木農業高校の東新一先生（Ｈ元年卒）、小笠原理高先生（Ｈ３年卒）には企画、運営を含め多大なご協力を頂いたことに、この場を借りて謝意を表する。

文責：加藤（幸）

弘前大学農学生命科学部五十年史の訂正

五十年史編集委員長　齊藤　寛

弘前大学農学生命科学部五十年史に誤植および記述漏れのご指摘がございました。以下のように訂正および加筆致します。関係者各位に多大なご迷惑をおかけしましたことを陳謝致します。

訂　正

138頁　　農学科　農業経営学　豊田　豊 → 豊田　隆に訂正

加　筆

140頁　　応用生命工学　細胞工学　教授　菊池英明

165頁　　1963年４月　藤野　清鷹助手赴任（金木）

165頁　　1964年６月　田口　善一助手赴任（金木）

会費納入と住所通知のお願い

平成19－20年度会費5,000円を未納の方は、同封致しました振込用紙でお納め下さいますようお願い致します。なお、既に平成19－20年度会費をお納め下さいました会員様には振込用紙を同封しておりません。転勤や転居で住所が変更になりましたら、事務局までご一報下さい。

同窓会事務局

〒036-8561　弘前市文京町３　弘前大学農学生命科学部同窓会

工藤　明　電話　0172-39-3842（FAX 兼用）　E-mail　akudo@cc. hirosaki-u. ac. jp
松崎　正敏　電話　0172-39-3804　E-mail　mma@cc. hirosaki-u. ac. jp
加藤　幸　電話　0172-39-3869（FAX 兼用）　E-mail　kato@cc. hirosaki-u. ac. jp

訃報

森　敏夫　先生（元教授　農場）
佐々木　信介　先生（元教授　作物学講座）

上記の会員がご逝去なさいました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

弘前大学創立60周年記念事業への募金のお願い

平成20年６月から平成21年３月までの期間、弘前大学創立60周年記念事業の募金を行っています。

◆個人の場合　１口５千円（できるだけ２口以上のご協力をお願いいたします）
◆法人の場合　１口の金額は特に定めておりません
この寄付金は、所得税法、法人税法による税法上の優遇措置が受けられます。

★主な事業内容
1　記念式典・記念講演会
2　国際交流基金の設立
3　弘前大学創立60周年記念史刊行

お振込先
○青森銀行　弘前支店　普通　１２２７１４１
○みちのく銀行　弘前営業部　普通　２６１１７６７
○郵便局　０２２１０－２－５３９９１
○東奥信用金庫　富田支店　普通　１０９８９００

口座名義　国立大学法人弘前大学　学長　遠藤正彦

【問合せ先】　国立大学法人弘前大学総務部総務課　tel　０１７２（３９）３００７

農学生命科学部での光景

附属農場が開設50周年で記念式典

電話ボックス撤去後の跡地

中庭の紅葉

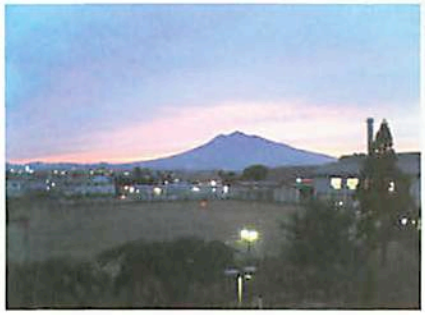
オープンキャンパスで新生農学生命科学部をアピール

オープンキャンパスに多数の高校生来学

附属農場50周年でのアップルビーフ販売に長蛇の列

サイエンスパーク・標本展示室が開設

研究室の絆を深める学祭企画



岩木山の夕景

学祭では農学生命科学部らしさを発揮

最新の情報は同窓会ホームページでご覧下さい（http://nature.cc.hirosaki-u.ac.jp/dosokai/）